

2021年3月期第2四半期決算説明会・電話会議 質疑応答議事録

日時 2020年11月19日(木) 10:30~11:30

説明者 代表取締役社長 吉貴 寛良

取締役 専務執行役員 経理・財務本部長 大橋 二三夫

経理部 部長 鳥山 圭一

経営企画室 室長 波切 稔和

- Q1. 通期業績見通しにおける下期の営業利益率は2.7%の見込みだが、3.5%の実力はまだないということか？
- A1. 下期における新型コロナウイルスの影響が不透明な為、2.7%としたが、引き続き3.5%を目指して活動を進める。
- Q2. ボデー系部品の新たなビジネスモデルは、いつ頃から決算に表れてくるのか？
- A2. 現在、ボデー系部品の開発強化を進めているが、2024年度頃から決算に表れてくると見込んでいる。
- Q3. 通期業績見通しにおける中国セグメントにおいて、前年度に比べ売上高が伸びるなか、営業利益が伸びない理由は？
- A3. 前年度に比べ減価償却費が増えたことと、中国では今年度も価格改定がある為、営業利益が伸び悩む見通し。
- Q4. インドでの今後の事業環境をどう考えているのか？
- A4. お客様の生産台数が回復してくれば、利益貢献できると見込んでいる。また今後の市場拡大に期待している。
- Q5. 新型コロナウイルスによる環境の変化、EV化へのスピード加速など、フタバ産業の競争力、位置づけに変化はあるか？
- A5. 充電インフラ、電池の供給能力などEV化へはまだ課題が多い。2035年頃までは排気系部品が必要なHVの台数が伸びていくと見込んでいる。長期的には、EV化に伴う構造変化に対応できるようなボデー系部品の提案、燃料電池車への提案について、先行開発として取り組んでいる。今後、構造開発と設備制作を一緒に提案することが可能となり、今まで得意先が行っていた付加価値領域を我々が担うことができる様になると期待している。

- Q6. トヨタグループの競合各社との再編はあるのか？
- Q6. 当社の様な昔からある事業領域についてはあまり活発に検討されているという認識はない。今後もトヨタとしっかりコミュニケーションをとっていきたい。
- Q7. EV化が進むとホットスタンプ部品は増えるのか？
- Q7. EV化とホットスタンプに相関はない。今後は冷間超ハイテン材が主流になると考える。
- Q8. 情報環境機器事業は今後どうするのか？
- Q8. 生産の中心が中国からベトナムへと広がっている為、富士ゼロックスとコミュニケーションをとりながら現在、検討している。

以上